

THY KINGDOM COME

み国が来ますように

祈りのしおり

2022 年 5 月 26 日～6 月 5 日（昇天日～聖霊降臨日）



日本聖公会

あなたの霊によって私たちを 新たにしてください

+ ----- +

『Thy Kingdom Come（み国が来ますように）』は、昇天日から聖霊降臨日にかけて行われる、世界的な運動に付けられたタイトルです。この運動は、2016年にイギリス国教会に向けて発せられたカンタベリー大主教とヨーク大主教の呼びかけによって始められ、世界的な運動に成長しています。そして、『み国が来ますように』を祈るすべての人々がイエスさまとの交わりを深め、イエスさまの証人となるための自信を新たにし、他の人をイエスさまのもとに導くことを目的とします。

イエスさまは昇天する前に、『あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となる（使徒言行録1:8）』と言われ、弟子たちは、『心を合わせて、ひたすら祈りをしていた（同1:14）』ことを手本にして、わたしたちもこの期間に祈りに励むわけです。

お祈りの期間は昇天日（5月26日）から聖霊降臨日（6月5日）までの11日間です。具体的には、クリスチャンに導きたい家族、友人、知人5名を選び、しおりに名前を記し、その5人のために11日間祈っていきます。

日本聖公会は、この運動に 2020 年から参加してきました。今年度は、新たな試みとして、各日のテーマ（イエス、賛美など）は、英語版から引用しましたが、大きな主題（道、心の底から湧き上がる思いなど）、聖書箇所、み言葉の解説、祈りなどは日本聖公会主教会として作成しました。

昇天日と聖霊降臨日の間の、希望に満ちた待望と祈りの日々の中で、私たちがみな、聖霊によって刷新され、キリストにあって新たにされますように。

日本聖公会主教会



Thy Kingdom come のウェブページ
日本語のページも用意されています。
祈りの登録や各種資料も準備されています。
<https://www.thykingdomcome.global/>

以下に、あなたがこの期間中に祈りに覚えたい人たちの名前を書いてください。そして、神さまがそれらの人々の人生や生活を変えくださるよう祈りましょう。

私が覚える 5 人は…

1. _____

2. _____

3. _____

4. _____

5. _____

The Prayer for Thy Kingdom Come 「み国が来ますように」の祈り

全能の神よ、あなたは天に昇ったあなたのみ子によって、み国の福音を宣べ伝えるようにと、わたしたちをこの世に送り出されました。どうかあなたの霊によってわたしたちにひらめきを与え、わたしたちの心にあなたの愛を灯してください。そして、あなたの言葉を聞くすべての人が、あなたのもとに集えますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン



道

み言葉

イエスは、垂れ幕、つまり、ご自分の肉を通して、新しい
生きた道をわたしたちのために開いてくださったのです。

（ヘブライ 10：20）

人生を旅になぞらえることはよくあります。旅という
からには、一か所にじっと留まっているのではなく、いつ
も何かを求めて移動します。今日はあそこまでこの道を通
って・・・、明日は寄り道をしたいので別の道を・・・と
私たちは道を選択します。人生もそうです。予想していた
道と違って後悔もします。反対に、思いがけない良い事が
あって嬉しくなることもあります。

ザアカイが「イエスに出会ったのも道端でした。必死で
よじ登った木の下からイエスは呼びかけます。降りてきな
さいと。その一言でザアカイの人生は変わります。姦通の
現場で取り押さえられた女は、神殿の境内まで引きずられ
てきます。イエスはその裁きを女にではなく、そこにいる
それぞれの胸に投げかけます。そして女に、「わたしもあな
たを罪に定めない。行きなさい」と新たな道を示されます。

病い、困難、孤独、悲しみ、絶望の中にいる人に、イエスはいつも最後におっしゃるのです。「安心していきなさい」と。そして私たちが皆、安心してみ国に入れるように、ご自分は十字架への道を歩まれるのです。ゴルゴタの十字架への道、それはあまりにも残酷であり孤独です。「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」とイエスは叫びます。罪を知らない方を罪とされた神の贖いの業が成就され、私たちの歩む道の先にみ国が開けるのでした。

私たちは人生の途中で、何度も行き詰ります。不安になります。なぜ、このような苦しみが私に・・・、愛する人に・・・と。堅く保ってきたと思っていたはずの信仰も色あせて見えるときがあります。そのようなとき、やはり主イエスの歩かれた道に心を寄せます。主は私の代わりにゴルゴタの道を歩かれ、十字架にかかれたのだと。そして、私たちは、その道のかなたに復活の光を望みながら、またそこから新たな人生を歩み始めるのです。

祈　り

私たちの歩む道は狭く、曲がりくねり、寂しく、先が見えないこともあります。私たちの道となってくださった主よ、どうか、私たちの足元をあなたの光で照らし、目的地にたどり着くことができるように導いてください。主のみ名によってお願いいたします。アーメン

5月27日

第2日目 - 賛美

心の底から湧き上がる思い

み言葉

- ² 主よ、私の祈りを聞いてください。
この叫びがあなたに届きますように。
- ³ 苦難の日に、御顔を隠さず、私に耳を傾け
呼び求める日に、速やかに答えてください。
- ¹⁸ 主はすべてを失った者の祈りを顧み
その祈りを軽んじませんでした。
- ¹⁹ このことは後の世代のために書き記されるべきです。
新たに創造される民は主を賛美するでしょう。
- (詩編 102:2-3, 18-19)

私たちはどのような時に神様を賛美するのでしょうか。
たくさんのお恵みをいただいて喜びに満ち溢れている
とき？ 悩み苦しみから解放され、救われたと感じたとき？
病気が癒されたとき？ ほかにもあるかもしれませんが、
多分そのような時にこそ神様の愛の御業を感じ、神様を
賛美する思いが、沸々と湧き上がってくるのでしょうか。

一昨年来の新型コロナウイルス感染症のまん延のため、
私たちは様々な制限下で、いつ自分や家族が感染するの
とか、誰もが重症化する危険にさらされているといった
不安の中を生きています。正直なところ、そのような状況
の中で神様に賛美を献げるのは、なかなか難しいですね。

詩編第 102 編の読み人も同じようなこと、いやそれ以上の不安と不信を感じていたのでしょう。自分のこの叫び（祈り）が神様のもとに届きますようにと願いますが、その背後には「祈りと叫びは本当に届くのだろうか」という、一抹の不安が漂っています。苦難の日・呼び求める日に速やかに答えてくださいと叫ぶ背後には「今まではあまり答えていただいたことがないし」という諦めが流れているような気もします。

しかし、それでもこの人は「神様はこのような自分をも顧みてくださり、自分の祈りを軽んじられなかった」と断言します。それも「新たに創造される民、自分よりのちに生まれる民は神様を賛美する」と確信しています。

この確信、未だ来ていない、見ていないにもかかわらずこのように断言する根拠はどこにあるのでしょうか。

それは、「自分が最終的に頼れるのは、主なる神様しかない」という魂の叫びであり、そのことに気づいた喜びが賛美の声に変わるのではないのでしょうか。

祈り

誠実なる神さま、あなたは私たちが苦難のうちにあって自分にしか目を注いでいない時でも、私たちを見守ってくださいます。どうか私たちがその愛に満ちたあなたに気づき、心から賛美することができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

5月28日

第3日目 - 感謝

祈り・覚えられている

み言葉

何事も思い煩ってはなりません。どんな場合にも、感謝を込めて祈りと願いを献げ、求めているものを神に打ち明けなさい。
(フィリピ 4:6)

高校生の頃、学校の先生から「〇〇さんはあなた方一人ひとりの名前を覚えて毎日お祈りしてくださっています」という話を聞いて衝撃を覚えました。見知らぬ誰かから覚えられ祈られていること、教会で誕生日や洗礼・堅信などの記念日を覚えて祈られていることは、私たちの想像を超える力となっています。

使徒言行録の10章に、祈りと施しを大切にしていた百人隊長コルネリウスが、幻の中で天使から名前を呼ばれ、「あなたの祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。」(使徒言行録10:4b)と伝えられました。いくつかの幻の経験によって、皮なめし職人のシモンやユダヤ人のペトロとの出会いを通して、汚れに対する常識(差別や偏見)が覆され、誰もが同じ神さまから愛されている人間であることや、イエスさまによって愛と赦しと平和の福音が告げ知らされたことを確信し、聖霊が降って洗礼を受けるに至りました。

私たちは、祈りを通して支えられ、神さまから覚えられていることに感謝したいと思います。そして、祈りを通して幻に気付かされ、誰かのために祈り仕える者へと変えられていきます。そして、分け隔てなく愛してくださる方への感謝の心を持つことができ、聖霊の導きによってそれぞれの働きへと送り出されるのです。

神さまに覚えられていることに感謝し、祈り・祈られていることを知るものでありたいと願います。

祈 り

私たちをいつも守り、導いてくださる神さま、あなたに覚えられ、聖霊の導きを与えてくださっていることに感謝いたします。あなたの望まれるみ国がこの世界に実現するために、私たちを愛と赦しと平和の仕え人として遣わしてください。すべての人が支え合い、自然を含むすべてのいのちの尊厳が保たれることを願い、祈り働く者とならせてください。私たちの主イエス・キリストのみ名によって、お願いいたします。アーメン

向きを変えて（焦点をどこに？）

み言葉

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。
(マルコ 1:15)

伝道を始められたイエス様の第一声は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」でしたが、「先ず悔い改め、それができたとみるや福音を信じる」と取れなくもありません。しかし、原文の感覚は「悔い改めることは、即ち福音を信じること」と言えます。「悔い改める」とは、「方向転換」「転じる」というのが元の意味です。「目を転じる、心を転じる」と言いますが、それまで見えずにいた何か、見ようとしていなかった何かが見え始めてくる、感じずにいた何かを感じ始めるということが起こり始めます。目先の事、己の事だけに目や心に向けていた自分が誰かを思う時、即ち視線や心の向きを変える時、広がり、深み、豊かさが芽生えることが起こり得ます。

ある映画のシーンが思い浮かびます。世界的に活躍している有名なドクターをモデルにした作品です。彼は若き日に精神を患い入院することになりますが、同じく入院中のアーサー・メンデルソンという実業家からいきなり目の前に四本指を差し出され「これが何本に見えるか？」と

問われます。「四本」と答えると、「これが四本か、お前は間違っている！」と撥ねつけられます。そこで夜、彼を訪ね、「さっきの四本指の答えを」と尋ねます。すると「直ぐに答えを尋ねるな！」と一喝されますが、遂に教わります。「これが何本に見えるか？」、依然として四本ですが、アーサーは言います。「そうじゃない、焦点を向こうに置け」と。すると八本に見えました。目の焦点距離によるものですが、「目の前にあるものだけに捕らわれるな！先を見ろ。そうしたら世界は広がる！」と教わります。

向きを変え、焦点を移してみる時、確とそこにいらっしゃる方も見え始めてくるでしょう。そのために、「自分は今どこを向き、何が見えているか？」という思い巡らしも大切なことでしょう。

祈 り

いのちの授け主なる神様、私たちは日々の出来事や思い煩いに心塞がれ、乱れ、自分しか見えなくなることがあります。どうか、そのような自分に気づかせ、聖霊によって向き直ること、向きを変えることができるように導いてください。常に私たちの傍らに、いのちの内におられる、働かれるあなたに気づかせてください。あなたの素晴らしい業に与り、み国を実現することができますように、私たちの目と心と耳を開いてください。主イエス・キリストによって、お祈りいたします。アーメン

5月30日

第5日目 - 献 身

まことの豊かさ

み言葉

彼らは苦しみのゆえの激しい試練を受けていたのに、喜びに満ち溢れ、極度の貧しさにもかかわらず、溢れるばかりに豊かな真心を示したのです。 (II コリント 8: 2)

このみ言葉は、貧しさの中にあるにも拘らず、喜びに満ち溢れて喜んで与えることを通して、そこに豊かな真心が示されたことが記されています。

それは貪欲とは正反対の流れです。それは、主イエスさまのご生涯そのものです。主は世に降り、すべての悔い改める罪人を、罪の死から命に救うため、すべてを与えられて十字架に架かってその両腕を大きく開かれました。それは、申命記 15 章 8 節によれば、相手の必要とするものを与える姿勢とされています。

主イエスさまは、ご自身の命までもそれを必要とする罪人のために与え尽くされました。しかし、すべてを与え尽くした十字架の死から 3 日目に、主は復活されました。それは、すべてを与え尽くしたところに、父なる神さまによってすべてが与えられたということが示されています。

私たちは、自らが欲してそれを得ることにより、もっともっと豊かになることができると思い込んでいるかも知れません。しかし、実際には、得れば得るほどに豊かになるどころか、却って貪欲さが増し、貧しくなってしまうのです。

逆に、与えれば与えるほど私たちは、むしろ豊かになる、それがまことの豊かさであり、主イエスさまによって神さまが示してくださった豊かさなのです。

私たちが喜びをもって施しをする時、私たちは貧しくなるものではありません。主イエスさまが十字架に架かりすべてをお与えになり、そして復活されて栄光の内に父の御許に昇られたように、私たちも与えることによってその豊かさはますます増し加えられていくのです。

祈 り

私たちを造り、存在させてくださった父なる神さま、私たちに豊かな祝福を与え、イエスさまによってみ国の命に招いてくださったことを感謝いたします。すべてを与えて十字架で死なれたイエスさまを復活させられて神さまがすべてを与えられたことにより、私たちがまことの豊かさを尊び、自らを与えて互いに相手の必要のために喜んで施し、共に分かち合うことを通してみ国を現わしてゆくことができますように。アーメン

5月31日

第6日目 - とりなしの祈り

感謝をもって、誰かのために祈る

み言葉

私は、祈りの度に、あなたのことを思い起こして、いつも私の神に感謝しています。 (フィレモン 4)

聖職として初めて派遣された教会で、四苦八苦しながら牧会を始めた頃のことです。何をやっても上手くいかず、深い海の底に沈んだような息苦しさを感じながら、日々がただ過ぎていきました。そんな時に、高齢者施設にお住まいの、ある信徒さんを訪問しました。当時 Mさんは90歳。車椅子の Mさんの手をとって、彼女を覚えて祈りました。最後にアーメンと応えてくださった Mさんは、今度は私の手を握り直して、なんと、私のために、小さな声でこう祈ってくださったのです。

「神さま、どうか、この若い先生を、あなたが励ましてください。どうか、この先生とご家族を、あなたがお守りください。感謝をもって、あなたに祈ります。アーメン」

聖職者のつとめは、信徒のために祈ることだと、肩に力を入れてばかりいた私は、聖職も、信徒に祈られ、神さまにとりなしてもらえるのだということを、その時、知りました。Mさんに手を握られ、祈られながら、思わず涙が溢れ出し、止まらなかったのを覚えています。

今、私は、あの時に M さんが、「感謝をもって」祈られたことに、あらためて教えられています。確かに、パウロはフィレモンのため、とりなしを祈る時、神さまへの感謝をもって祈っていました。私たちは、とりなし祈るとき、どれほど神さまへの感謝と共に祈っているのでしょうか。

「テサロニケの信徒への手紙一」の中でも、パウロはこう書いています。「絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」(5:17)

パウロにとって、とりなし祈ることと、感謝することは決して切り離されないものでありました。私の祈りを神さまが果たして実現してくださるかではなく、私が祈る時、神さまは、すでに私の祈りを聴いてくださった。その事実により、信頼し、感謝することこそが信仰なのだと思います。私たちは、どんなことをとりなし、祈るときも、いつも神さまに感謝する者でありたいと願うのです。

祈 り

どんな時も私たちの傍らにいてくださる神さま、私たちは誰かを覚えてあなたに祈り、同時に、私たち自身が誰かに祈られている存在であることに、どうか気づかせてくださいますように。そして、私たちのそれぞれのとりなしと祈りを、感謝をもって、あなたに届けることができますように、強め、励ましてください。主イエス・キリストのみ名によって。アーメン

6月1日

第7日目 - 助け

招かれている

み言葉

イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」と言われた。
(マルコ 1:17)

私たちは、初めに挙げた5人の人たちを始め、さまざまな人たちともっと知り合いたいという気持ちはあるのですが、声を掛ける勇気がなかなか出てきません。ですので、忙しそうだ、誰かと楽しそうに話している、どんな反応をされるか分からない、などと声を掛けない理由を探してしまいます。それでも思い切って呼びかけることにして、「〇〇さん」と呼び掛けて、簡単な用件も言いましょうか。そして次に何を言いましょう。本当は一緒にいたいだけなので、話題もすぐなくなるかも知れません。

「〇〇さん」と呼び掛けるとき、それは相手と自分の関わりが急に大きくなるのでとても危うい瞬間ですが、自分の思いを届け、相手の思いを受け止める豊かなときであるはずです。ただ、声をかける勇気がなかなか出ない、話題が続かない。自分は人とうまくやっていけないし、5人の人たちもうまくやれるタイプではないかも知れません。その上、自分も5人の人たちもそのほかの人たちも、

たいてい大きな課題を抱えていて、人とスムーズに関われないことが多いのではないのでしょうか。

ただ、同じ呼びかけを私たちはイエス様から受けておりました。イエス様は私たち一人ひとりの個性の違いに戸惑いながらも声をかけてくださいます。「〇〇さん、わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」言い換えると、「〇〇さん、わたしについて来なさい。人と一緒にいる者にしよう。」えっ、こんな私が？ こんなに大きな課題を負っているのに？ あの 5 人も？ いろんな疑問がわいてきますが、力のない寂しい私に、力のない寂しいイエス様が「人と一緒にいる者にしよう」と十字架の上から呼び掛け、そしてご復活の朝からずっと招いてくださっております。

祈 り

主なる神様、重い課題を負っている私たちに目を向け、いつも招いてくださっていることを感謝します。何の準備もない私たちですが、あなたのいつくしみ深い招きの声に応える恵みの道を進ませてください。主イエス・キリストによってお祈りいたします。アーメン

6月2日

第8日目 - 敬 愛

これ以上大きな愛はない

み言葉

私があなた方を愛したように、互いに愛し合いなさい。
これがわたしの戒めである。友のために自分の命を捨てる
こと、これ以上に大きな愛はない。私の命じることを行う
ならば、あなたがたは私の友である。(ヨハネ 15:12-14)

私のはじめてキリスト教の教話を聴いたのは、中学1年生の時でした。その時のお話は今も私の心に残っています。
「1957年2月のある夜。神戸に向けて航行するデンマークの船が、和歌山日高町の沖合で、火災を起こしている日本の船を発見した。風速20mを超える強風が吹き荒れる中、デンマーク船の乗員たちは、凍てつくような海に投げ出された日本の船員たちの救助作業を開始した。しかし強風の中なかなか救助が進まない。その中で、機関長のクヌッセンさんは勇敢にも身の危険をかえりみず、暗夜の激流の中に飛び込んだ。決死の救助にもかかわらず日本の船員何人かが犠牲となり、クヌッセンさんも帰らぬ人になった。翌朝クヌッセンさんの遺体が日高郡日高町の海岸へとうちあげられた。このことを聞いた日高の人々は深い悲しみと共に感銘を受け、勇敢な彼の魂を弔いたいと

供養碑を建て、今も献花や清掃を絶やすことなく慰霊の気持ちを捧げ続けているという。そして彼の仕事場である機関室には、よく読みこまれた聖書が残されていた。彼は仕事の合間に、聖書をよく読んでいた。」その時の聖書箇所がヨハネ 15：12～14 で、クヌッセンさんの勇敢な行動の背後には、彼の深いキリスト教信仰があったのではないかという教話でした。友どころか、全く名も知らぬ外国の人を救助するために、凍てつく海に飛び込むとは、何と勇敢な人だろうと思い、そうした勇気や愛を与える聖書とは何か、イエスとはどんな人なのかという思いが、中学 1 年生だった私の心に宿った時でもありました。

今回この聖書箇所を読み直してみて、14 節に「あなたがたは私の友である。」とあるということが心に残りました。私たちを友と呼んで下さり、友のために命を捨てて下さったのは、十字架の主イエスでした。これ以上に大きな愛はない「愛」を私たちに与えて下さっているのは主イエスです。クヌッセンさんはこの主イエスの愛をしっかりと受け取って、生きていた人だったのでしょうか。

祈 り

み名を畏れ愛する心を絶えず私たちにお与えくださる主よ、
どうかみ摂理のもとにわたしたちを守り、変わることはない愛によって、育て導いてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

6月3日

第9日目 - 祝 福

祝福して下さるイエスさま

み言葉

「子どもたちを私のところに來させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。よく言っておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子どもたちを抱き寄せ、手を置いて祝福された。(マルコ 10:14-16)

イエスさまとファリサイ派の人々が結婚についての神学論争をした後で、イエスさまと弟子たちは家に戻り、イエスさまから結婚についての考え方を聞いていました。そこへ人々がイエスさまに祝福していただくために、子どもたちを連れて來ました。弟子たちは、今は大切な神様のことを勉強しているのに子どもを連れて來て邪魔だ、というのでしょうか。弟子たちは子どもたちを連れて來た人々を叱ったのです。その弟子たちを見て、憤られたイエス様が言われたのが、今日のみ言葉です。

イエスさまは宣教の初め、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい(マルコ 1:15)」と言われました。神の国とは神さまの支配とか、お働きと考えることが出来ます。そういう神の国を受け入れるとは、

信じることです。イエスさまによってこの世界に神様のお働きが持ち込まれた、と信じることです。そう信じる事が出来て初めて、私が神の国の中に入っているということを発見することが出来る、というのです。なんだか、なぞかけのようですね。

もし私たちが、私たちの周りで神さまが働いていてくださるということを信じれば、こんな良いことが起こった、ラッキー、ということはありません。それは神さまのお働きでしょう。上手くいかないことは、神さまが今はストップしなさい、と言われているのかな、と考えることも出来ます。そうした生活こそイエス様に祝福された生活です。

祈 り

天におられる神さま、あなたはこの世界にイエスさまを遣わし、私たちを祝福してくださっています。どうかみ前に覚える5人の人達を祝福し、彼らがイエスさまこそ私たちの救い主であって私たちを導き、恵みで満たしてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

6月4日

第10日目 - 沈黙

愛に満たされる

み言葉

主なる神、イスラエルの聖なる方はこう言われる。

「立ち返って落ち着いていれば救われる。

静かにして信頼していることにこそ

あなた方の力がある。」

(イザヤ 30:15)

前神戸教区主教の中村豊主教様が退職される時、ご自身の教区主教のお働きを振り返って、毎朝の主教座聖堂での礼拝前 30 分の黙想のときが、わたしの働きを支えてくれました、と教区報に記されていたのを覚えています。様々な課題を抱え悩みながら、時には解決策もないまま、ただ静かに神様の前にとどまることで一日のエネルギーをいただいたことでしょう。

沈黙は、ただおしゃべりをしないということではありません。マザー・テレサは「思いと目と舌の沈黙が必要です」と言っています。一人静かに目を閉じて神様の御前にとどまることです。神様の愛に信頼し、在るがままの自分で、自分の弱さ、不安、恐れ、怒り、迷い、あるいは喜びや感謝、すべてをさらけ出して。その時に神様に愛されていることを深く感じる事が出来るでしょう。

わたしたちがよりよく他の人びとと関わり、仕えるためには、独りになって神様の前に沈黙することが必要です。

祈 り

主なる神様、わたしは今、あなたの前に静かにとどまります。あなたがわたしに語る言葉をお聞かせください。またあなたがわたしを通して語る言葉をお示してください。そして、あなたの愛でわたしを満たしてください。主イエス様によってお願いいたします。アーメン

6月5日

第11日目 - 聖霊降臨

聖霊に祈る

み言葉

突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、"霊"が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。 (使徒言行録 2:2-4)

聖霊降臨日の出来事を読むと、私は聖霊と聖霊の賜物のことを思います。神さまが数々の聖霊の賜物をくださり、私をスーパーマンのようにして下さると、病んだ世界の中でも意気揚々と歩めると思うのです。でも、それでは人間の弱さや醜さ、罪を思いやれなくなりそうです。わたしは、弱い時にこそ強い（2 コリント 12:10）を覚えます。

聖霊降臨日の教えることは、相互理解と一致です。歴史、文化、言葉、習慣が違う所からエルサレムに集まった人々は、夫々の言語で福音を聞きました。福音を受け入れた人々には聖霊が与えられ、キリストの弟子となりました。神さまは、教会を立ち上げ、宣教のために聖霊の賜物を与えられました。

私たちの中には、いつも 2 つの願いがあります。1 つは自分に対する願い、もう 1 つは社会に対する願いです。それは神さまの願いでもあります。神さまは私たちに変化を望まれます。キリストのようになることです。そして社会に対しては、私たちの住む世界が天のみ国のようになることを望まれておられます。聖霊降臨日の出来事は、私たちを新たに生まれさせ、神の国の建設のために、私たちを派遣するための、神さまが贈られた恵みです。

祈 り

神さま、あなたは私たちに、イエス・キリストという福音と聖霊の賜物を与えられ、この世界を神の国とするために、夫々の場に遣わしておられます。どうぞ、私たちが与えられた恵みの賜物と、主が共におられるという信仰をもって、日々の務めを果たすことが出来ますようにお守り下さい。そして、1 日も早く、世界を神のみ国にして、皆が平和に安心して、共に生きることが出来るようにして下さい。そのためにも、自分だけでなく、あの人、この人のためにもいつも祈る人にして下さい。主イエス・キリストによってお願い致します。アーメン

おわりに

今年の祈りのしおりは、主教会で作成しました。11 日間の祈りはどうだったでしょうか。みなさんのお祈りが実現されますようにお祈りいたします。

使徒言行録 2 章にある聖霊降臨の出来事を読みますと、いつも思い出すことは、五旬祭の日が来たから、聖霊降臨の出来事が起こったということではなくて、弟子たちの不足の気づきと補充ということです。イエス様の約束を信じで聖霊降臨を待っていた弟子たちは心を合わせて熱心に祈っていました（1：14）。そこで彼らが祈りの中で気づかされたことは、ユダがいなくなったことでした。そこで彼らは一人足りない主の復活の証人を選び、マティアを仲間に加えます。何かが足りないということに気づくこと、そしてそのことを補うことです。補って待っていたところに聖霊が降って来られました。この 11 日間の祈りの中で、私の中に、教会の中に、コミュニティの中に何かが足りないのではないかと振り返ってみること、そしてその足りないものを見つけ、補うことも大切なのではないかと思います。

今年のしおりについての感想、また要望などがありましたら管区事務所「み国が来ますように」係までお知らせください。来年に向けてみなさんのご意見を反映させていきたいと思います。



※ 聖書は、『聖書 聖書協会共同訳』を使用しました。





(Illustrations : Anna Heslop.)

発行

日本聖公会管区事務所

2022 年 4 月 1 日

